

「超世の悲願」

親鸞聖人がお作りになった『帖外（じょうがい）九首の和讃』をたまたま目にするがありました。何気なく読んでいたのですが、目に留まった一首がありました。それは、「超世の悲願ききしより われらは生死の凡夫かは 有漏（うろ）の穢身はかはらねど ころろは浄土にあそぶなり」という和讃です。

何故この和讃が気に掛かったかと言うと、私の考え方とは全く違っていたからです。

私はずっと、人間は変わらなければいけないと思っていました。煩惱にまみれ何も変わることをできない人間ではいけないと思っていました。「善い人間になれ」「悪いことはしてはいけない」「善悪をしっかり弁（わきま）えることのできる人間にならなければいけない」と。

でも、この和讃を読むと、親鸞聖人は「有漏の穢身はかはらねど」とおっしゃっています。驚きました。変わらなくてもよいのかと。私はここで考えさせられました。

仏教は迷いを断ち切ってというか、煩惱を断って悟りを開いて仏になる教えだと思っていました。凡夫のままではすぐわれないから、凡夫である状態から、凡夫でない自分になって初めてたすかるのだと思っていました。でも、私が思っていたように本当に変わることはできるのでしょうか。変わらなければいけない。このままではいけないと思い続けてきた自分は、思い返せば何も変わっていなかったのです。変わらないというか、変わることをできない自分に苛立ち、情けない思いがつのるばかりでした。

ところが親鸞聖人は、そんな自分ではあるけれど、「ころろは浄土にあそぶなり」とおっしゃっています。この言葉には、何か吹っ切れたような、解放されたような清々しい心の有り様がうかがえます。「あそぶ」という言葉で表現できるような人生を親鸞聖人は見つけられたのだと思います。

その根拠は「超世の悲願ききしより」という言葉にあると思います。そのような生き方が始まる「超世の悲願」を私も聞けるようになりたいと思っています。